

日本語の形容動詞に関する予備的研究： 第一言語獲得過程と動的文法理論

A Preliminary Study of Nominal Adjectives in Japanese: The Process of First Language Acquisition and the Dynamic Model of Grammar.

大野清幸
Seiko Ono

Abstract

This study proposes two hypotheses to explain the derivations of nominal adjectives in Japanese, based on the Dynamic Model of Grammar proposed by Kajita (1977, 1984, 1986a, 1986b, 1997, 2002, 2004a, 2004b). Hypothesis 1: as the first step, verbal adjectives are derived from previously input verbal adjectives, with some properties inherited from its basic type (category), verbs, and some properties inherited from its model (category), nouns. Hypothesis 2: as the second step, nominal adjectives are derived from previously input nominal adjectives, with some properties inherited from its basic type (category), nouns, and some properties inherited from its model (category), verbal adjectives. We argue for hypotheses 1 and 2 from the following three perspectives: the diachronic perspective, the synchronic perspective, and the perspective of first language acquisition. The derivations are driven by the principle of conventionality and the principle of contrast proposed by Clark (1987, 1990, 1993, 2003, 2009). Our speculation is that the derivations are also driven by the principle similar to the principle of maximal perceptual contrast proposed by Jakobson (1941, 1968, 1971).

第1章 序

日本語には、従来、国文法において形容動詞と呼ばれる単語群がある。言語学や日本語学において、これらは名詞的形容詞 (nominal adjectives) と呼ばれている。異なる分野・文献で異なる用語が使われているので、下記に対応表を作った。

表1 形容詞と形容動詞に対応する用語

形容詞	形容動詞	文献
イ形容詞	ナ形容詞	金田一 (1988), 高橋・他 (2005:137)

verbal adjectives 動詞的形容詞 動詞性形容詞	nominal adjectives 名詞的形容詞 名詞性形容詞	Kuno (1973), Martin (1975) Kuno (1973), Martin (1975) の用語の日本語訳 中村 (1993)
true adjectives 真の形容詞 adjectives 形容詞 第一形容詞	nominal adjectives 名詞的形容詞 adjectival nouns 形容詞的名詞 第二形容詞	Clancy (1985) Clancy (1985) の用語の日本語訳 Miyagawa (1987), Ohkado (1991) Miyagawa (1987) の用語の日本語訳 村木 (1998), 工藤 (2007), 八亀 (2007,2008)
canonical adjectives 標準的形容詞	nominal adjectives 名詞的形容詞	Nishiyama (1999) Nishiyama (1999) の用語の日本語訳

動詞的形容詞 (verbal adjectives) と名詞的形容詞 (nominal adjectives) を用語として使いたいのだが、読者の利便性を考慮し、本稿では、形容詞と形容動詞を使う。

形容詞、形容動詞が文中に現れる場合、その出現位置には2通りあり得る。それ自身が述語になる場合と、連用修飾語または連体修飾語になる場合である。英語学では、形容詞の叙述用法と限定用法と呼ぶ。これについても、異なる分野・文献で異なる用語が使われているので、下記に対応表を作った。

表2 叙述用法と限定用法に対応する用語

叙述用法	限定用法	文献
predication	modification	Slobin (1985)
叙述	修飾	Slobin (1985) の用語の日本語訳
陳述的機能	修飾的機能	中村 (1993)
述語形式	連体形式	村木 (1998:46)
predicative	attributive	Fujiwara (1999)
叙述的な、述語	限定的な、属性的な	Fujiwara (1999) の用語の日本語訳
述定用法	装定用法	八亀 (2001) など
predicative adjectives	prenominal adjectives	Sasaki (2004) ¹⁾
叙述形容詞	名詞の前の形容詞	Sasaki (2004) の用語の日本語訳
述語になる場合	規定語になる場合	工藤 (2007), 八亀 (2007,2008)
述語用法	規定用法	村木 (2009)

本稿は、形容動詞の縦断的第一言語獲得研究を行う前段階として、形容動詞の派生に関する予備的研究を行う。主として、叙述用法を研究する。第2章で日本語の形容詞と形容動詞に関する研究を概観する。第3章で名詞の統語特性を基準にして、名詞、形容動詞、形容詞を比較

し、事実観察を行う。動的文法理論 (the Dynamic Model of Grammar) ²⁾に基づく仮説 1・2を設定し、Wetzer (1996), 小椋 (2007), 坂本・針生 (2011), Fujiwara (1999), 村木 (1998), 吉原 (2012) の研究成果、及び形容動詞と名詞が共有する統語特性に関する言語事実を用いて、その論証を試みる。八亀 (2001), 金田一 (1950) の研究成果を組み合わせて、仮説 3 を提示する。第 4 章で結論を述べる。

第 2 章 従来の研究

国語学における形容動詞を含む形容詞研究は多数ある。国立国語研究所 (1972), 飯豊 (1973), 柏谷 (1973), 鈴木・林 (1973, 1984), 春日 (1976), 慶野 (1976), 小島 (1984), 山崎 (1984), 北原 (2010) など。

日本語学における研究として、森田 (1989,2008), 飛田・浅田 (1991), 中村 (1993), 村木 (1998), 仁田 (1998), 高橋 (1998), 矢澤 (1998), 加藤 (2003,2007,2009), 田川 (2005), 高橋・他 (2005), 工藤 (2007) などがある。特に、八亀 (2001,2003,2004a,2004b,2005,2007,2008) の一連の研究と工藤 (2007) は、類型論の成果を取り入れ、日本語形容詞の記述的研究を推進した。

生成文法理論による研究として、Miyagawa (1987), Ohkado (1991) がある。Minimalist Program による研究として、Nishiyama (1998,1999) が日本語形容詞を含む文の内部構造(階層構造)を分析し、新提案をした。Yamakido (2000), Namai (2002) が反論し、Namai (2002) に対しては、Nishiyama (2005) が再反論している。動詞と形容詞の形態統語論的な相違点については、田川 (2005)を参照。形容動詞に関する直近の研究として吉原 (2012) がある。谷 (1997) は「インターフェイスに動機づけられた言語」という Minimalist Program を徹底した試みの結果、Chomsky 流の普遍的語彙範疇という仮説に問題があることを論証しており、重要な研究である。

動的文法理論による英語と日本語における形容詞類の限定用法に関する分析として、Sasaki and Yagi (2003), Sasaki (2004) がある。語彙範疇全般については、谷 (1997) を参照。

日本語形容詞の第一言語獲得に関する研究には、大久保 (1967,1984), 高橋 (1975), Clancy (1985), 伊藤克敏 (1990,2005), Fujiwara (1999), 今井・針生 (2007), 小椋 (2007), 坂本・針生 (2011), 毛 (2011) がある。語彙獲得全般については、小林 (1997,2008), 今井・針生 (2007), 小椋 (2007) を参照。

形容詞に関連する類型論的研究には、Thompson (1988), Bhat (1994), Wetzer (1996), Stassen (1997), Croft (2001), Givon (2001), Beck (2002), Pustet (2003), Backhouse (2006), Dixon and Aikhenvald (2006) などがある。

飯豊 (1973), 谷 (1997), 村木 (1998), Fujiwara (1999), Sasaki (2004), 吉原 (2012) は、形容詞・形容動詞を研究する際、今後も必ず考慮に入れなければならない決定的に重要な言語事実を報告している。しかるに、谷 (1997), Fujiwara (1999), Sasaki (2004) 出版後の形容詞・

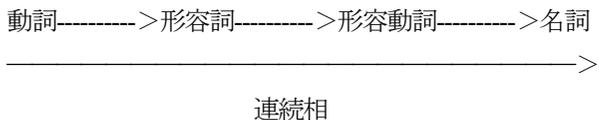
形容動詞研究のほとんどで、これら3つの論文への言及が無い。

2.1 Wetzter (1996), 八亀 (2001,2003,2004a,2004b,2005,2007,2008), Baker (2003)

八亀 (2001,2003,2004a,2004b,2005,2007,2008) は、話しことばにおける形容詞の述語用法を記述的に研究し、形容詞論を談話の中で位置づけた。八亀 (2008:63) は、「シナリオや小説の会話文などでは、形容詞が述語として機能している場合が圧倒的に多い。」と指摘している。これは、「談話では、形容詞が述語として圧倒的に多く用いられている。」という重要な指摘である。日本語の形容詞は、話しことばで述語用法が優位であることが判明した。村木 (2009:87) は、以下のように述べている。「著者が話しことばの形容詞を追求していたとき、評者は書きことばの形容詞に関心を寄せていた。書きことばにおける形容詞は規定用法が主たる機能であることが確認された。日本語の形容詞は、話しことばで述語用法が、書きことばで規定用法が優位であることが明らかになった。」

八亀 (2008) の第2章は、「形容詞の基本的な性質」を分析している。述語の「時間的限定性」に着目し、形容詞を、名詞や動詞との関連の中で、述語がもつ「時間的限定性」というカテゴリーによって位置づけている。工藤 (2002) の貢献である「時間的限定性」という意味特性を基準とした「文の意味的なタイプの連続相」については、八亀 (2007:65 図2), 八亀 (2008:20) を参照。

八亀 (2001:7) は、形容動詞について以下のように述べている。「前節で確認した「連続相」としての形容詞認識に基づいて考えるとき、「形容動詞」はいわゆる形容詞 (イ形容詞) と名詞との間に位置づけられることが予想される。



形容詞述語文を類型論的に扱った Wetzter (1996:47) も、日本語について同様の図式を提案している。そこで、このような予想をもとに、名詞述語文との連続のありかたについて注目しながら進めていくこととしたい。」

「4.6 Are adjectives universal?」において、Baker (2003:238 (86)) も以下のようにまとめている。

- | | |
|--|-----------------------|
| 「(86) Transitory situations | Permanent situations |
| a X---(verbs)---X------(Adjs)-----X---(nouns)---X | (English) |
| b X---(verbs)---X--(A1s)---X--(A2s)-----X--(nouns)---X | (Japanese?) |
| c X---(verbs)---X------(nouns)-----X | (Chichewa?, Quechua?) |
| d X------(verbs)-----X---(nouns)---X | (Mohawk?)」 |

意味範疇と諸言語の語彙範疇との対応関係については、谷 (1997:32 (3)) が興味深い。八亀 (2001:7) の矢印が連続相を成しているということしか意味していないという前提の下、連続相

の考え方には同意である。ただ、第3章で述べる通り、この連続相は第一言語獲得過程の産物、結果であることが自然であろう。

2.2 工藤 (2007)

工藤 (2007:46-47) は、日本語諸方言の形容詞を調査研究した結果の概略として、次の4点にまとめている。

「(1) 第1形容詞、第2形容詞、名詞は<連続的>であって、方言ごとに多様なバリエーションがある。特に、第2形容詞は、未発達であったり、第1形容詞寄りに振る舞ったり、名詞寄りに振る舞ったりする。品詞分類においては、連続性を前提としたプロトタイプ化が重要になってくるだろう。

(2) 動詞らしい動詞である運動動詞にはない形態論的カテゴリーとして<時間的限定性>がある。時間のなかで展開する動的現象を表さない形容詞述語や名詞述語では、特定時の<一時的状態>か、時間限定のない<恒常性>かの区別が重要になってくるのである。また、形容詞述語には<表出>を明示する形式が発達している。<表出>とは<発話時における話し手の評価>を前面化するムード形式であるとするれば、形容詞述語においては、<広義ものの特徴づけ>という客体的側面と<話し手の評価>という主体的側面とが統合化されていることを示している。

(3) 上記のような、一時的状態や表出を明示する形式を含めて、諸方言では、形容詞述語の形態論的形式が豊富である。書き言葉ならぬ日常的話し言葉としての諸方言における、このような形態論的形式の豊富さは、話し言葉では、形容詞が、規定語（連体修飾語）ならぬ<述語>としても一次的に機能することを示していると思われる。

(4) 日本語には複数の存在動詞があるが、運動動詞寄りの「人の存在動詞」と形容詞寄りの「ものの存在動詞」では、文法化の方向（経路）が異なっている。」

2.3 村木 (1998)

村木 (1998:46) は、名詞と形容詞に属すと考えられる単語の連体形式と述語形式を次のように整理している。

「名詞と形容詞に属すると考えられる単語の連体形式と述語形式を整理してみると、次のような組み合わせがえられる。述語形式は、非過去叙述法で代表させる。

	連体形式	述語形式				
(1)	-い	-い	長-	高-	かた-	
(2)	-い/-な	-い	大き-	小さ-	おかし-	
(3)	-い/-な	-い/-だ	暖か-	柔らか-	細か-	
(4)	-な	-だ	しずか-	おだやか-	立派-	
(5)	-な/-の	-だ	わずか-	さまざま-	特別-	(格の体系なし)
(6)	-の	-だ	がらあき-	上々-	大荒れ-	(格の体系なし)

- (7) -い/-の -い/-だ 丸- 四角- 茶色-
 (8) -な/-の -だ 健康- 自由- 親切- (格の体系あり)
 (9) -の -だ りんご- 机- 遊び- (格の体系あり)

(1)は第一形容詞、(4) は第二形容詞、(9) は名詞の典型である。(中略) 以上をまとめると、(1)から(6)までが形容詞、(9)が名詞、(7)と(8)は、両品詞がかさなっている部分ということになる。」

上記(1)から(9)は形容詞から名詞への連続体と見なすことができる。実態を真剣に視ようとするれば見えてくる、事実観察のお手本のような実例である。「両品詞がかさなっている」という記述など、中間体や派生形を認識していることが推測される重要な事実観察である。

連続体という観点、見方について、ここで Slobin (1997:294) から引用しておきたい。

「3.5. Summary 3.5.1. What is Grammatical Morpheme?

There is a cline of linguistic elements from fully lexical content words to fully specialized grammatical morphemes, but there is no obvious place to draw a line between lexical and grammatical items.¹⁰ This point has been underlined by Hopper and Traugott (1993, p.7):

Synchronically a cline can be thought of as a “continuum” : an arrangement of forms along an imaginary line at one end of which is a fuller form of some kind, perhaps “lexical,” and at the opposite end a compacted and reduced form, perhaps “grammatical.” ... Linguists may not agree ... on whether a particular form is to be placed ... in the lexical area or the grammatical area of the cline.」さらに、Slobin (1997:294 footnote 10) がとても重要な指摘をしている。

「¹⁰ Note that the existence of clines wreaks havoc with parameter-setting theories, which rely on discrete categories and principles that are applicable throughout a language.」

第3章において紹介する動的文法理論を採用する者にとっては、当然の考え方であるが、Sasaki (2004:70) も以下のように述べている。

「Thus, even in prenominal adjectives like (20)-(22), we see a sort of gradience that develops from ‘basic’ to ‘derivative’.」

一口に連続体と言っても、アルク (<http://www.alc.co.jp/>) の英辞郎によれば、cline (連続体、クライン：中間にさまざまな異種がある段階的な変異の仕方)、continuum (連続したつながり、連続体：その中のどの点を取ってもその近くの領域と明確に区別できないような広がり)、gradience (連続的段階性) とある。本稿では、Slobin (1997:294) と同様、cline か、Sasaki (2004:70) 同様、gradience (連続的段階性) という観点、見方で「連続体」という表現を用いる。

2.4 吉原 (2012)

吉原 (2012:68) の「10. おわりに」から引用する。

「本論文では、日本語の形容動詞の性質を考察し、日本語を母語とする人がもつ言語知識の中

で、形容動詞がどのような知識として存在するかを様々な角度から考察した。第2章では、学校文法において「形容動詞」がおかれた背景として形容動詞と他の範疇を分けるものとして指摘されてきた現象を示し、第3章では形容動詞と形容詞が統語的には同一のものであるとする Nishiyama (1999) の研究を紹介した。第4章では、これらと他の現象を合わせて、形容動詞と他の語彙範疇がどのような体系をなしているかを素性によりとらえた。(1)の通りである。

(1)	動詞 (「食べ(る)」):	[+V	-N]
	動名詞 (「研究」):	[-V	+N +D +S]
	名詞 (「緑色」):	[-V	+N +D -S]
	形容動詞 (「静か(な)」):	[-V	-N +D]
	形容詞 (「高(い)」):	[-V	-N -D]

第5章では、形容動詞と形容詞を中心に、成立の歴史と活用の変遷をたどり、形容動詞が形容詞と異なる歴史的背景を持つこと、名詞との間に共通性のあることを見た。これは(1)に沿ったものであった。第6章では、アクセントの観点から日本語の語彙分析を行った。アクセントにおいては、形容動詞は名詞と似た傾向をもち、形容詞は動詞型と名詞型の間接的な性質を示すことがわかった。第7章では、形容動詞と形容詞が述語となるととき共通してとるコピュラの中に、音形を持たない要素「 ϕ 」が存在することを提案した。これは現在時制において形容動詞・名詞と非断定の要素の間に終止形に対応して現れるものであり、形容動詞と名詞の共通性を支持するものである。形容動詞は、その名称からも、形容詞との共通点が目に付きやすく、第3章で紹介したように形容詞と統語的には同じであるとする提案もある (Nishiyama 1999) が、以上様々な角度から検討すると、形容詞と全く同じものではなく、名詞との共通点も多く、しかしそのどちらとも異なることがわかった。」

吉原 (2012:12) が以下のように述べているが、「生まれた状態では「形容動詞+形容詞」という範疇のみが示唆されており」というのは実態ではないと本稿 (第3章) は考える。

「生まれた状態では「形容動詞+形容詞」という範疇のみが示唆されており、その中には2種類あること、それが(9)によって分かれることが、経験により獲得されるのであれば、形容詞に「である (de ar)」をつけてしまう、あるいは形容動詞に「く (ある) (k-ar)」をつけてしまうといったように、正しい知識にいたるまで子どもが試行錯誤することが考えられる。これについて、Clancy (1985) では、形容動詞に形容詞の活用をつけた誤用が報告されている。

(10) *きれい-くない, *きれい-かった (2:4) (波多野 1968)

*いっぱ-くない (藤原 1977:233)

しかし、Sumihare (0-7歳)(Noji et al. 2004)・Aki (1歳5ヶ月-3歳)(Miyata 2004a)・Tai (1歳5ヶ月-3歳7ヶ月)(Miyata 2004b) の3人の子どもの発話について、形容動詞「だめ」「いや」「好き」「きれい」「同じ」「上手」「大丈夫」「大事」の9語を CHILDES (MacWhinney 2000) で調査したところ、両者を混同していると考えられる誤用は見つからなかった。また、Clancy (1985) に報告されているのはいずれも「い」で終わる形容動詞 (語幹) の例である。

特に形が形容詞と似たものに限られているので、これをもとに「形容動詞と形容詞の間に混乱がある」とは言い切れない。ただし、今回調査した範囲は狭く、より多くのデータに当たる必要がある。」

2.5 小椋 (2007)

小椋 (2007:29) から要旨を引用する。「日本の子どもの初期の語彙の構成を日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙(JCDIs)標準化データ,縦断データ,横断データから明らかにした。特に子どもの初期の語彙が名詞優位か動詞優位かの問題を検討した。第1に JCDIs で語彙の構成を調べた結果,名詞が一番高い比率を占めていた。第2に, JCDIs で20ヶ月児158名の名詞,動詞,形容詞,閉じた語の語彙の構成を調べた結果,名詞の比率が高く, Bornstein et al. (2004) の7カ国の結果と一致していた。第3に2名の子どもの縦断データから語彙急増期の後は名詞優位,その後,文法発達に伴い動詞優位になることを明らかにした。母親の語彙は動詞優位であった。第4に,31名の日本の子どもと養育者の玩具場面と絵本場面の観察では絵本場面では一貫して名詞優位であったが,玩具場面では言語発達に伴い動詞優位に移行していった。玩具場面の養育者の発話は動詞優位で子どもの結果とは一致していなかった。以上の結果から,言語発達初期の子どもは名詞を学習しやすい概念的な傾向を有していると結論づけた。最後に名詞優位を引き起こす語学習のメカニズムについて論じた。」

2.6 坂本・針生 (2011)

坂本・針生 (2011) は3歳児41人と4歳児44人を被験者として新奇形容詞と新奇名詞の意味を推測させる横断的実験を行った。坂本・針生 (2011) が使用した新奇言語ラベル (語彙) は「ナソ (い), マノ (い), ミハ (い), ニメ (い)」である。坂本・針生 (2011:29) は以下のように報告している。「その結果,4歳児は,初めて耳にした形容詞を (名詞と区別して) 属性に対応づけることができることを見出された。すなわち,4歳児は,形容詞条件では名詞条件より多くの属性反応を示し,下位カテゴリー反応は名詞条件で形容詞条件より有意に多かった。(中略) 一方,3歳児の場合,下位カテゴリー反応は,名詞条件で形容詞条件より多かったものの,属性反応を示す程度は,名詞条件と形容詞条件で差がなかった。この結果から読みとることができるのは,3歳児は,新奇な形容詞を提示され,それが名詞でない (したがって,事物の名前と解すべきではない) ことはわかっていたかもしれないが,それを特定の属性に対応づけるところまではできなかった,ということである。」

坂本・針生 (2011:29-30) は以下のように続けている。「初めて耳にした形容詞の意味をすばやく的確に推論するためには, (a)その語が名詞でなく形容詞であることを見きわめ, (b)その形容詞を対応づけるべき概念として対象から属性を抽出しなければならない。このうち3歳児にとっての困難は, (b)のプロセスにあることを明確にしたのは,やはり本研究の貢献といえる。さらに,本研究は,いつになれば子どもは,初めて耳にした形容詞を即時マッピングできるよ

うになるのかという問題について、日本語圏の子どもも、英語圏の子どもと同様に4歳ころであることを見出した。」

その上で、坂本・針生 (2011:30) は以下の補足をしている。「まず、本研究で問題にしたのは、子どもが、初めて耳にする形容詞を的確にすばやく意味に対応づけられるかどうか、すなわち、形容詞を即時マッピングできるかどうか、ということだった。このような“当たりをつけるための推論 (guess)” は、おとなも知らない単語に出合えばもちろん行くだろうが、子どもも4歳になればかなりうまくできるようになる、というのがここで得られた知見である。しかし、だからといって本研究は、3歳以下の子どもは形容詞を学習できないということを主張するものではない。たった一度新しい形容詞を耳にただけで、すぐに“当たり”にたどりつくことができなかつたとしても、日常生活の中で何度も耳にする形容詞なら、時間をかけてその正しい意味を抽出していこう。おそらくそのようなプロセスの結果として、3歳の子どもの、それなりの数の形容詞は使いこなすようになっているのは確かだ。」

2.7 Fujiwara (1999)

Clancy (1985:399-406) を参考に、形容詞・形容動詞の屈折 (活用) の接尾辞を、Fujiwara (1999: Table 1) は次のようにまとめている。

	VA class	NA class
	utukusi- ‘beautiful’	kiree- ‘beautiful’
Predicative		
Nonpast	-i	-da
Past	-katta	-datta
Negative	-ku-na-i/-katta	-de-na-i/-katta
Attributive	-i	-na

Table 1: Suffixes for Japanese adjective inflections]

被験者は、幼児10人 (5歳児5人[age 5;0-5;3]と4歳児5人[age 4;0-4;7]) と成人24人。全員が日本語しか話せない日本語母語話者。幼児のデータはすべて日本で、成人データはすべて米国で採取。日本語形容詞の語幹32 (形容詞16、形容動詞16) と新奇形容詞の語幹32 (形容詞16、形容動詞16) が発音して提示され、被験者は、その語幹を屈折させた形で人形に指示するよう依頼された。

Fujiwara (1999: Figure 7) は、実験結果が示唆する形容詞と形容動詞の獲得順序を次のようにまとめている。

「第1段階 No class distinction between VAs and NAs (4-year-olds)

-> Children analyze that -katta is the past tense suffix for adjectives in general.

第2段階 Productive use of the NA suffix -datta: replacing -katta with -datta (5-year-olds)

-> Overgeneralization

第3段階 Reanalyzing and relearning of VAs as a separate class from NAs

->Two inflectional classes of adjectives (VA class and NA class as the default)

Figure 7: A proposed acquisition sequence for Japanese adjectives]

すなわち、4歳児は形容詞にも形容動詞にも、過去時制接尾辞として-kattaを使う。5歳児は形容詞にも形容動詞にも、過去時制接尾辞として-dattaを過剰般化して使用する。その後、形容動詞が形容詞とは異なる類であると再分析、再学習して、使い分けることができるようになる。

最後に、Fujiwara (1999) は、結論を次のようにまとめている。

「This study made it clear that Japanese children started with one of the adjectival inflectional suffixes (-katta), which was not the default form in the adult language. Eventually, they came to learn the other inflectional suffixes (-datta) and started to use it as the default, like the adults. What remained unanswered is how the children come to distinguish the two types of adjectives. Once the category distinction has been acquired, on what basis do children classify the adjectives they encounter every day? Are they stored in memory or triggered by some class features? We will leave these questions to future research.」

上記に関連して、付言すると、Clancy (1985:402-403) は、動詞屈折の獲得がかなり早いのに比べ、形容詞屈折の獲得が大幅に遅れる事実を指摘し、説明を加えている。

第3章 代案：第一言語獲得過程と動的文法理論

3.1 動的文法理論

本稿で提示する形容詞と形容動詞の派生に関する代案は、Kajita (1977,1986a,1997,2002)、梶田 (1984,1986b,2004a,2004b) が提案している動的文法理論に基づくものである。理論の詳細は省くが、動的文法理論の Theory Format を(I) に示す。

(I) 動的文法理論の Theory Format (梶田 (1984:79), Sasaki (2004:68 (16))

A. Structures of type X are possible in G. [G=Grammar]

B. If structures of type Y are in G_i^j , then structures of type Z are possible in G_{i+1}^j .

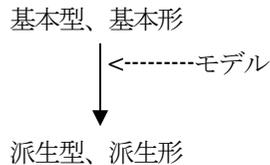
(Superscripts indicate particular languages and subscripts, stages of language acquisition)

Kajita (2002:161) の Theory Format を(II) に示す。Kajita (1997:390-391 (21)) がより詳しい。

(II) If the grammar of a language L at stage i, $G(L,i)$, has property P, then the grammar of the language at the next stage, $G(L,i+1)$, may have property P'.

動的文法理論における花形であるモデル依存の拡張（model-dependent extension）の Format を(III) に示す。

(III) 動的文法理論におけるモデル依存の拡張（model-dependent extension）



他の言語理論と比べ動的文法理論の際立つ最大の特徴は、言語獲得過程（= 時間軸）を共時的言語理論に取り入れている点である。共時的言語事実に言語獲得過程の軌跡、痕跡が残っていると考へ、事実観察することになる。同時に、言語獲得過程の事実や通時的言語事実も参考にできる。

3.2 形容動詞に関する言語事実

以下、名詞の統語特性を基準に用い、名詞・形容動詞・形容詞の言語事実を確認する。³⁾

統語特性[1] X。 (= 一語発話)

(1a) ほん。(noun、nominal、N、名詞)

(1b) きれい。(nominal adjective、NA、名詞的形容詞、ナ形容詞)

(1c) 熱い。(true adjective = verbal adjective、VA、動詞的形容詞、イ形容詞)

統語特性[2] N+X。 (= Xの叙述用法、二語発話)

(2a) これ 本。

(2b) これ きれい。

(2c) これ 熱い。

統語特性[3] NP+ (は/が) +XP+だ。

(= 非過去時制の繫辞「だ」を含む文、XPの叙述用法、多語発話)

(3a) これ (は/が) 本 だ。

(3b) これ (は/が) きれい だ。

(3c) *これ (は/が) 熱い だ。

統語特性[4] NP+ (は/が) +XP+だった。

(= 過去時制肯定文、XPの叙述用法、多語発話)

(4a) これ (は/が) 本 だった。

(4b) これ (は/が) きれい だった。

(4c) *これ (は/が) 熱い だった。

(4d) これ (は/が) 熱かった。

統語特性[5] NP+ (は/が) +XP+じゃない。

(= 非過去時制否定文、XP の叙述用法、多語発話)

(5a) これ (は/が) 本 じゃない。

(5b) これ (は/が) きれい じゃない。

(5c) *これ (は/が) 熱い じゃない。

(5d) これ (は/が) 熱く ない。

統語特性[6] NP+ (は/が) +XP+じゃなかった。

(= 過去時制否定文、XP の叙述用法、多語発話)

(6a) これ (は/が) 本 じゃなかった。

(6b) これ (は/が) きれい じゃなかった。

(6c) *これ (は/が) 熱い じゃなかった。

(6d) これ (は/が) 熱く なかった。

統語特性[7] NP+ (は/が) +XP+です。

(= 非過去時制の繫辞「です」を含む文、XP の叙述用法、多語発話)

(7a) これ (は/が) 本 です。

(7b) これ (は/が) きれい です。

(7c) これ (は/が) 熱い です。

統語特性[8] NP+ (は/が) +XP+でした。

(= 過去時制の繫辞「でした」を含む文、XP の叙述用法、多語発話)

(8a) これ (は/が) 本 でした。

(8b) これ (は/が) きれい でした。

(8c) *これ (は/が) 熱い でした。

統語特性[9] NP+は/が+XP+なのだ。

(= 非過去時制の繫辞「なのだ」を含む文、XP の叙述用法、多語発話)

(9a) これ は/が 本 なのだ。

(9b) これ は/が きれい なのだ。

(9c) *これ は/が 熱い なのだ。

(9d) これ は/が 熱い のだ。

統語特性[10] XP+の+NP (= XP の限定用法、連体修飾句、多語発話期)

(10a) あなたの 本 (NP+の+NP)

(10b) *きれいの 花

(10c) *冷たいの スープ

(10d) きれいな 花 (NA+な+NP)

(10e) 冷たい スープ (VA+NP)

表3 名詞、形容動詞、形容詞の統語特性比較（共通点と相違点）

統語特性 \ Xの語彙範疇	名詞	形容動詞	形容詞
統語特性[1] X。	○	○	○
統語特性[2] N+X。	○	○	○
統語特性[3] NP+ (は/が) +XP+だ。	○	○	×
統語特性[4] NP+ (は/が) +XP+だった。	○	○	×
統語特性[5] NP+ (は/が) +XP+じゃない。	○	○	×
統語特性[6] NP+ (は/が) +XP+じゃなかった。	○	○	×
統語特性[7] NP+ (は/が) +XP+です。	○	○	○
統語特性[8] NP+ (は/が) +XP+でした。	○	○	×
統語特性[9] NP+は/が+XP+なのだ。	○	○	×
統語特性[10] XP+の+NP	○	×	×

上記の統語特性[1]-[10]を基準にして、名詞、形容動詞、形容詞の統語特性を比較し、共通点と相違点を見ると、形容動詞と名詞の共通性が際立つ。⁴⁾ 形容動詞が名詞を基本型、形容詞をモデルとして、意味的・機能的に形容詞の方向に拡張した派生型と考えるのが自然であろう。

名詞、形容動詞、形容詞の統語特性を比較する場合も、統語特性[1]-[10]の内、どれがより重要な特性かを考えた方がよい。最も重要な特性は、統語特性[10] (XP+の+NP) だと考える。XPの限定用法である上に、名詞、形容動詞、形容詞の統語特性が各々異なるので、名詞、形容動詞、形容詞の統語特性の相違が際立つのである。次に重要な特性は、統語特性[3] (NP+ (は/が) +XP+だ。) と考える。XPの叙述用法の基本型と考えられるからである。

3.3 代案：仮説1+仮説2

本節では、代案として仮説1、仮説2を提案する。

(IV) 仮説1：形容詞の派生、獲得に関する仮説

第一段階：形容詞の派生：形容詞という新しい語彙範疇が生成される。

動詞（基本型）————>最大知覚対比の状態<-----名詞（モデル）

入力された形容詞



プロトタイプ的な形容詞（派生型）の安定化、語彙範疇化

通常、ある語彙範疇のプロトタイプ、基本形は獲得時期が早く、使用頻度も高い。形容詞では、「(非存在を表す単独使用の) ない、ほしい、痛い、熱い、冷たい、暑い、寒い」などがある。

通時的証拠

Wetzer (1996) による通時的分析を八亀 (2007:72-73) から引用する。

「Wetzer (1996) は、諸言語の形容詞述語文について観察した結果、The Tense Hypothesis を主張している。これは、単純化して言うと、当該言語で、テンスが形態論的に明示される場合は、形容詞は名詞よりの特徴を示し、逆にテンスが形態論的に明示されない場合は、形容詞は動詞よりの特徴を示す、という仮説である。そして、日本語に2種類の形容詞があることについて、簡単にまとめると以下のように述べる。

日本語は古いステージではテンスが形態論的に明示されていなかった。その段階では第1形容詞（つまり動詞よりの形容詞）を持っていた。しかし、日本語が通時的变化によって、テンスを形態論的にマークする言語に変化した（aspect-oriented から tense-oriented へという言い方をしている）。そのため、第1形容詞は closed class になり、名詞寄りの第2形容詞が発達し open class となった。

この仮説は、史的研究にとっても刺激的であるが、方言研究にとっても、第2形容詞の発達とも関連して興味深い指摘である。」

動的文法理論では、「第一言語獲得過程は当該言語現象の通時的变化を繰り返すことが少なくない」と考えている。たとえば、大名 (1990a,1990b) が共時的分析として論証した「接続詞としての *immediately* の派生過程」と同じことが、*immediately* の通時的变化過程で発生していたことを、Ohna (1997) は OED (= Oxford English Dictionary) の CD-ROM データをコーパスとして利用し確認している。児馬 (1984) も参照。⁵⁾

すなわち、仮説1と仮説2は、Wetzer (1996) による形容詞と形容動詞の通時的分析とも整合する分析で、支持証拠を得ることになる。

第一言語獲得過程からの証拠

仮説1が成り立つためには、第一言語獲得において、形容詞の発達が動詞の発達と名詞の発達より遅れている事実が確認されなければならない。これについては、大久保 (1967) を始めとして、数多くの縦断的研究報告がある。さらに、第2章で概観した小椋 (2007) が、「日本の子どもの初期の語彙発達」を研究し、「名詞優位→動詞優位→形容詞」を報告している。小椋 (2007) は、日本の子どもの初期の語彙の構成を日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙 (JCDIs) 標準化データ、縦断データ、横断データから明らかにした。特に子どもの初期の語彙が名詞優位か動詞優位かの問題を検討し、言語発達初期の子どもは名詞を学習しやすい概念的な傾向を有していると結論づけた。そして、最後に名詞優位を引きおこす語学習のメカニズムについて論じている。

ここで「一語発話期から出現する出現（使用）の早い否定語「いや、だめ、ない」は形容詞類である」という反論が予測される。たしかに、大人の文法で、「いや、だめ」は形容動詞、（非存在を表す単独使用の）「ない」は形容詞である。しかし、言語獲得の最初期において使用され

る表現は、状況と結びついた定型表現であり、形容詞・形容動詞という語彙範疇はもちろん、形容詞・形容動詞に相当する意味範疇もこの時期、まだ確立していないと考える。

これまでのところ、動的文法理論による研究の多くは、モデル依存の拡張の事例で、構文研究であることが多い。たとえば、藤 (1986a,1986b), 大名 (1990a,1990b), Ohna (1997), Sasaki (1997,2004), Sasaki and Yagi (2003), 大室 (2005) を参照。ただ、日本語の形容詞・形容動詞という語彙範疇の派生も、モデル依存の拡張の一種と考えられないだろうか。派生型(拡張型)は、モデルの特性の一部も受け継ぎつつ、基本型から派生するので、基本型の特性とモデルの特性をあわせ持つ中間体となる。動的文法理論による構文研究でよくある事例は、基本形から統語特性を受け継ぎ、モデルから意味特性・機能を受け継ぐ事例である。

従来の共時的研究で、形容詞の動詞性が強いことは確認されている。たとえば、動詞も形容詞も、述語になること。共に、屈折(活用)することなど。第一言語獲得における形容詞の獲得は限定用法よりも叙述用法が先であり、当然、動詞性が強い。⁶⁾ 統語特性[2] N+X. (= Xの叙述用法、二語発話) で見た通り、語彙範疇 X の叙述用法は二語発話期で出現する。伊藤友彦氏の一連の研究(伊藤 (1988), Ito (1989a, 1989b), 伊藤 (1990)) と筆者自身の縦断的観察経験から、健常児における二語発話期から多語発話期への移行は、通常、(1;11)-(2;0) と考えている。伊藤 (1990) の言う Prenominal Modifier Construction (=PMC)、すなわち、語彙範疇 X の限定用法は、「処理機構の変換を伴う「前統語構造期(格助詞未使用期) = 単語処理段階(処理単位が単語)」から「統語構造期(格助詞使用期) = 文処理段階(処理単位が句)」へ移行した後、すなわち、多語発話期に入って出現する。

動的文法理論を採用すれば、「人が形容詞という範疇を言語知識として形成する際、「形容詞の動詞性が強い」、すなわち、「動詞の統語特性のいくつかを形容詞が共有している」のは、基本型である動詞という範疇からいくつかの特性を受け継いでいるからである」と自然な説明ができる。

他方、形容詞の主要機能のひとつは、名詞の指示物が持っている属性を表すことである。坂本・針生 (2011:29-30) が述べている「初めて耳にした形容詞の意味をすばやく的確に推論するためには、(a)その語が名詞でなく形容詞であることを見きわめ、(b)その形容詞を対応づけるべき概念として対象から属性を抽出しなければならない。」作業の内、(b)の作業は名詞または名詞の指示物への参照なしには成り立たない。ここで論証はしないが、人が形容詞という語彙範疇を言語知識として形成する際、少なくとも、この意味で、モデルとしての名詞という語彙範疇からなんらかの特性を受け継ぐのであろう。

幼児の母音獲得に関して Jakobson (1941,1968,1971) が提案した the principle of maximal perceptual contrast (最大知覚対比の原理) に相当する原理、及び幼児の語彙獲得に関して Clark (1987, 1990, 1993, 2003, 2009) が提案した the principle of conventionality (規約性原理)、the principle of contrast (対比の原理) が、形容詞、形容動詞の語彙範疇形成においても作用しているのではないかと考えている。すなわち、名詞、動詞の順で語彙範疇がある程度で

きあがった段階で、名詞と動詞を対極にした状態で、「最大知覚対比の原理」が働き、名詞をモデルにしなが、入力された形容詞を基に、語彙範疇としての形容詞が派生するのである。

Clark (2003:143-144), Clark (2009:133) から関連部分を引用しておく。

「Two general pragmatic principles

Users of language observe two general pragmatic principles. First, they assume conventionality in the system they are using. That is, if a particular meaning is conventionally associated with a particular form, then speakers will use that form to convey the meaning in question. When they do this, they can be pretty sure that their addressees will interpret them as intended. When they don't, their addressees assume that, because the speakers used some other expression, they must mean something else (Clark 1987, 1990, 1993; Clark & Clark 1979). Conventionality can be defined as follows: Conventionality: For certain meanings, speakers assume that there is a conventional form that should be used in the language community.

In essence, speakers give priority to any already-established, conventional forms for the expression of particular meanings.

This pragmatic principle has an important corollary. Speakers also assume that different forms differ in meaning. If they use two different forms, they must intend two different things. And if they use a form different from the one anticipated, they must intend something else. This is the principle of contrast, which can be defined as follows: Contrast: Speakers assume that any difference in form signals a difference in meaning.

Conventionality and contrast interact in that speakers are expected to use conventional, already-established forms. When they don't (when they coin new terms, for example), their addressees assume that they must therefore be trying to express some other meaning, one not currently captured by a conventional term (Clark & Clark 1979).」

金田一 (1988:131) は、形容詞の語彙の少なさについて下記のように指摘している。

「日本語の形容詞については、柳田国男の『語彙論』に、「語彙が少なすぎる」と論じたことが有名である。たしかにわれわれは日常ちょっとした事物の形容を言い表すことばがなく不自由を感じることが多い。(中略)ところで、柳田が少ないという形容詞は「-い」という形の形容詞である。たしかにそれは少ないし、ことに新しいのがあまり出来ない。増えるのは、「ダサイ」とか、「ヤバイ」とか、あまり品位のない単語である。「黄色い」「茶色い」はやっと認められて市民権を得たが、「きれい」や「好き」を若い人がイを付けて、「キレイクナイ」とか「好キクナイ」とかいうと、(中略)日本語の乱れの例にされる。要するに形容詞は増えにくい。」

形容詞の語彙数が少ないことに加え、動詞 vs. 形容詞には、/u/ vs. /i/ という (非過去時制終止形) 語末の母音対比がある。語末の音は、Slobin (1985,1997) が言う perceptual salience (知覚上の顕著さ) が高い。数少ない形容詞の各語彙項目をグループ化し、形容詞という新し

い語彙範疇を形成することになる要因の一つであろう。そして、この場面で、**the principle of conventionality**（規約性原理）と **the principle of contrast**（対比の原理）が作用していると考えられるのである。

(V) 仮説2：形容動詞の派生、獲得に関する仮説

第二段階：形容動詞の派生：名詞由来の形容動詞という形容詞の語彙範疇が生成される。

形容詞（モデル）----->最大知覚対比の状態<-----名詞（基本型）

入力された形容動詞



プロトタイプ的な形容動詞（派生型）の安定化、語彙範疇化

通常、ある語彙範疇のプロトタイプ、基本形は獲得時期が早く、使用頻度も高い。形容動詞では、「いや、だめ、すき、きらい、きれい、じょうず、だいじ、だいじょうぶ、げんき」などがある。

仮説1を想定した上で、本稿で論証を試みたいのは、仮説2である。幼児の母音獲得に関して Jakobson (1941,1968,1971) が提案した **the principle of maximal perceptual contrast**（最大知覚対比の原理）に相当する原理、及び幼児の語彙獲得に関して Clark (1987, 1990, 1993, 2003, 2009) が提案した **the principle of conventionality**（規約性原理）、**the principle of contrast**（対比の原理）が、形容動詞の語彙範疇形成においても作用していると考えられる。すなわち、名詞、動詞、形容詞の順で語彙範疇が形成された段階で、名詞と形容詞を対極にした状態で、「最大知覚対比の原理」が働き、形容詞をモデルにしながら、入力された形容動詞を基に、形容動詞が派生、安定化して行くのである。名詞と共通する統語特性が多い事実を見ると、形容詞をモデルにしながら、名詞のあるメンバーから形容動詞が派生すると主張する方が良いかもしれない。

日本語において、形容詞とは別に、形容動詞という語彙範疇が発生する場面で、**the principle of conventionality**（規約性原理）と **the principle of contrast**（対比の原理）が作用する引き金となるのは、「3.2 形容動詞に関する言語事実」において観察した統語特性の内、形容詞と形容動詞の相違点となる統語特性群であろう。すなわち、統語特性[3]-[6], [8], [9] である。ひとつだけ例をあげれば、統語特性[4] 過去時制肯定終止形における形容詞と形容動詞の /katta/ vs. /datta/ という対比である。これらの統語特性群は、語末音である場合が多く、上述した Slobin (1985,1997) が言う **perceptual salience**（知覚上の顕著さ）が高い事例にも該当する。第2章で報告した Fujiwara (1999: Table 1) も参照のこと。

Slobin (1985) は、複数言語の第一言語獲得過程を研究した大規模プロジェクトの成果に基づき、**operating principles for the construction of language**（言語構築のための動作原理）を提案している。⁷⁾ 形容詞、形容動詞の獲得に関係する原理の一部を Slobin (1985:1251-1253) か

ら引用しておきたい。

「Appendix: Operating Principles for the Construction of Language

FILTERS FOR PRIMARY PERCEPTION AND STORAGE OF INPUT

ATTENTION TO SPEECH (中略)

OP (ATTENTION): END OF UNIT. Pay attention to the last syllable of an extracted speech unit. Store it separately and also in relation to the unit with which it occurs. (中略)

Entering and Tagging Information in Storage

OP (STORAGE): FREQUENCY. Keep track of the frequency of occurrence of every unit and pattern that you store.

OP (STORAGE): UNITS. Determine whether a newly extracted stretch of speech seems to be the same as or different from anything you have already stored. If it is different, store it separately; if it is the same, take note of this sameness by increasing its frequency count by one.

OP (STORAGE): CO-OCCURRENCE. For every segmented unit within an extracted speech string, note its co-occurrence with any preceding or following unit and store sequences of co-occurring units, maintaining their serial order in the speech string.

OP (STORAGE): UNIT FORMATION. If you discover that two extracted units share a phonologically similar portion, segment and store both the shared portion and the residue as separate units. Try to find meanings for both units.

THE PATTERN MAKERS

Grouping Information in Storage

OP (STORAGE): WORD CLASSES. Store together as a class all words (phonological speech unit and meaning) that co-occur with a given functor. Store together as a class words that co-occur with the same group of functors across utterances. Try to systematize word classes on semantic grounds, forming prototypes and looking for common features. (中略)

Strategies for Grammatical Organization of Stored Information

Organizing Information in Storage:

Linguistic Units

OP (UNITS): WORD FORMS. If you discover more than one form of a word or word-stem in storage, or if monitoring reveals a mismatch between your word form and that in the input, try to find a phonological or semantic basis for distinguishing the forms:

<後続する (a), (b), (c) は省略>

OP (UNITS): PHONOLOGICAL CONDITIONING OF ALLOMORPHY. If you discover diverse forms of a functor expressing a given Notion with regard to words of a particular class, compare these forms with the forms of the other functors and/or the word-stems with

which they occur.

<後続する (a), (b) は省略>

OP (UNITS): MORPHOLOGICAL PARADIGMS. If you find more than one functor expressing a given Notion relative to a particular word class, and choice of functor cannot be determined by phonological conditioning: (a) Try to find semantic grounds for subdividing the Notion expressed by the functors, and map each new Notion onto one of the functors.

<後続する (b), (c), (d) は省略>

吉原 (2012:12) が「生まれた状態では「形容動詞+形容詞」という範疇のみが示唆されており、その中には2種類あること、それが(9)によって分かれることが、経験により獲得されるのであれば、形容詞に「である (de ar)」をつけてしまう、あるいは形容動詞に「く (ある) (k-ar)」をつけてしまうといったように、正しい知識にいたるまで子どもが試行錯誤することが考えられる。」と述べているが、「生まれた状態では「形容動詞+形容詞」という範疇のみが示唆されており」というのは実態ではないと本稿は考える。

生まれた状態では「形容動詞+形容詞」に限らず、語彙範疇が示唆されているというようなことは無いのである。さらに、形容詞と形容動詞が形容詞類として同時期に安定化するのではないと考える。第一段階として、動詞と名詞の最大知覚対比の状態の中で、まず、形容詞という語彙範疇が成熟、安定化する。第二段階として、形容詞と名詞の最大知覚対比の状態の中で、次に、形容動詞という語彙範疇が成熟、安定化する。仮説1・2による形容動詞の派生2段階説は、第2章において概観した Fujiwara (1999), 坂本・針生 (2011) が横断的実験研究で論証した第一言語獲得過程の事実に基づいている。

上で、形容詞の語彙数が少ないことに触れたが、これが仮説2による形容動詞の派生の大きな要因になっていると考えられる。形容詞の語彙数が少ないため、表現したい意味に対応する形式（語彙）が存在しない文法段階がある。そのギャップを埋めるために、「ギャップの原則」と「顕在化の原則」が原動力となり、「モデル依存の拡張」の一種が発生するのであろう。⁸⁾ 正確に言えば、それぞれの形容動詞の派生・獲得に際し、「モデル依存の拡張」が生じているのであるが、本稿では、典型的な形容動詞について、形容動詞という語彙範疇総体として「モデル依存の拡張」が生じているように見なし、論証している。

日本語において、名詞由来の形容動詞という形容詞類が出現する現象は、第一言語獲得過程のある段階において獲得済みの古い形式である名詞に、形容詞という新しい意味機能を持たせているという点で、Slobin (1973) が指摘した「old forms for new function」現象の一種と考えられる。

仮説2を支持する共時的証拠として、下記3点を挙げておきたい。

共時的証拠 1

「3.2 形容動詞に関する言語事実」で観察した事実は、形容動詞と名詞が共有する統語特性を9つ示している。

共時的証拠 2

形容動詞と形容詞が統語的には同一のものであるとする Nishiyama (1999) をはじめ、形容動詞と形容詞の共通性を主張する研究は多い。しかし、「2.4 吉原 (2012)」で紹介した通り、吉原 (2012:第5章) の観察によれば、形容動詞は名詞との間に共通性がある。また、吉原 (2012:第6章) がアクセントの観点から語彙分析した通り、アクセントにおいては、形容動詞は名詞と似た傾向をもち、形容詞は動詞型と名詞型の間接的な性質を示す。

共時的証拠 3

「2.3 村木 (1998)」で紹介した通り、村木 (1998:46) は、名詞と形容詞に属すと考えられる単語の連体形式と述語形式を(1)から(9)まで整理しているが、(1)は第一形容詞、(4)は第二形容詞、(9)は名詞の典型である。要約すると、(1)から(6)までが形容詞、(9)が名詞、(7)と(8)は、両品詞がかさなっている部分ということになり、(1)から(9)は形容詞から名詞への連続体と見なすことができる。本稿で採用した動的文法理論のように、「可能な文法」を説明するための process-oriented approach であれば、「形容詞と名詞の間」に存在する多くの派生型、中間体を説明することが可能である。これに対して、梶田 (1986b)、Kajita (2002) が論証した通り、従来の言語理論のほとんどは、output-oriented approach であるため、派生型、中間体を説明できないことが多い。少なくとも、大きな困難に直面する。

3.4 仮説3

名論文である金田一 (1950) は、日本語動詞を瞬間動詞・継続動詞・状態動詞・第四種の動詞に4分類した。八亀 (2001:7) が提示した「動詞--形容詞--形容動詞--名詞」という連続相に、金田一 (1950) による動詞4分類を加味することで、下記、仮説3を提案できるだろう。ただし、本稿では、仮説3の提案のみにとどめる。

(VI) 仮説3：日本語における動詞と名詞の間の連続相に関する仮説

動詞 (瞬間動詞---継続動詞---状態動詞---第四種の動詞) -----形容詞---形容動詞-----名詞
連続相

「本稿で採用した動的文法理論のように、「可能な文法」を説明するための process-oriented approach であれば、「形容詞と名詞の間」に存在する多くの派生型、中間体を説明することが可能である。」と上述した。動的文法理論のように、「可能な文法」を説明するための process-oriented approach であれば、仮説3における「動詞と形容詞の間」にも多くの派生型、中間体が存在することを理論の帰結として予測する上に、それら「動詞と形容詞の間」に存在する派生型、中間体も説明することが可能である。

第4章 結論

本稿は、「可能な文法」を説明するための **process-oriented approach** である動的文法理論に基づく仮説 1・2 を論証した。形容詞と形容動詞が形容詞類として同時期に安定化するのではないのである。第一段階として、動詞と名詞の最大知覚対比の状況下、まず、形容詞という語彙範疇が安定化する。第二段階として、形容詞と名詞の最大知覚対比の状況下、形容動詞という語彙範疇が安定化する。仮説 1・2 による形容動詞の派生 2 段階説は、第 2 章において概観した Fujiwara (1999), 坂本・針生 (2011) 各々が横断的実験結果に基づき論証した第一言語獲得過程の事実と **process-oriented approach** の言語理論である動的文法理論に大きく依拠している。

本稿の考察過程で引用した従来の研究成果の事実から、表 4 の連動性が確認された。

表 4 日本語における形容詞、形容動詞の用法と連動する言語事実

叙述用法＝第一言語獲得において限定用法より先に獲得＝話しことばで限定用法より優位
限定用法＝第一言語獲得において叙述用法より後に獲得＝書きことばで叙述用法より優位

謝辞

本稿を、亡き恩師、宇賀治正朋先生に捧げる。ありがとうございました。

注

- ¹ Sasaki (2004:70) の以下の記述は興味深い。「One thing is to differentiate the “characterizing” and “lasting” properties of head nouns from others such as some meaning associated with subject-predicate relation (i.e. “temporary”). I consider “characterizing” and “lasting” to be the central meanings related to prenominal position and “temporary” to be central meaning related to predicative position.」日本語でも同様と考えられる。
- ² Kajita (1977) は the dynamic model of syntax (動的統語モデル)、Kajita (1997,2002) は the dynamic theories of language (動的言語理論) という名称を用いているが、本稿では、最も普及していると思われる動的文法理論 (the Dynamic Model of Grammar) を用いる。Kajita (2002:161) で、「There are two fundamentally different approaches to the problem of characterizing the notion of “possible grammars”: the output-oriented approach and the process-oriented approach. (中略) Virtually all the theories of generative grammar proposed so far fall within this category (=the output-oriented approach).」と述べた後、Kajita (2002) は、the process-oriented approach として the dynamic theory of language (動的言語理論) を解説、提案している。non-instantaneous theory of grammar (非瞬時的文法理論)、extension theory (拡張理論) などと呼ばれることもある。福地 (1987)、河野 (2012)、毛 (2012) も参照されたい。
- ³ 特性[3]-[9] は繫辞に関わる特性で、多くの研究では形態統語特性として扱われている。本稿では、分布や共起関係に関する特性として、他の統語特性と一括して扱う目的で、統語特性と呼ぶことにする。
- ⁴ 飯豊 (1973:196) が形容動詞と名詞の相違点となる統語特性を 6 つ挙げている。飯豊 (1973:190-196) は形容動詞語幹の統語特性を 13 挙げているが、(1)-(6) は用言的働きを示し、(7)-(11) は体言的働きを示す。
- ⁵ 児馬 (1984:110 注(3)) は、次のように述べている。「Kajita (1977) では、従来の瞬時的文法理論に代って、子供の習得過程をも説明しようような「非瞬時的」文法理論が展開されている。本稿は、その理論が習得だけでなく史的統語論に対しても重要な意味をもつことを示す試みでもある。」すなわち、**process-oriented approach** である動的文法理論による当該言語現象の共時的分析は、第一言語獲得過程の言語事実からも通時的言語事実からも傍証を得ることになるのである。
- ⁶ 英語の第一言語獲得においても形容詞の獲得は限定用法よりも叙述用法が先であることを Wells (1985) が報告している。Sasaki (2004:70) に引用がある。

- 7) O'Grady (1997:305-306) は、「第14章 Alternatives to UG」の第3節において、Slobin の接近法を、The Operating Principles Approach としてまとめている。下記はその冒頭部分である。「A somewhat different alternative to Universal Grammar can be found in the work of Dan Slobin and his colleagues, who propose that the acquisition device contains a set of procedures for analyzing linguistic data rather than an actual body of linguistic knowledge. (This is sometimes called 'process nativism' as distinct from the 'content nativism' associated with UG-based theories.) An idea along these lines was first put forward by Slobin (1966:87-88):
The child is born not with a set of linguistic categories but with some sort of process mechanism - a set of procedures and inference rules, if you will - that he uses to process linguistic data. These mechanisms are such that, applying them to the input data, the child ends up with [a grammar].
Subsequently (e.g., Slobin 1973, 1985), these procedural and inferential mechanisms came to be known as operating principles. Slobin (1985) proposes almost forty such principles, which he describes as "procedures for perceiving, storing and analyzing linguistic experience" (p. 1158).」
- 8) 「ギャップの原則」、「顕在化の原則」については、河野 (1984)、鈴木 (1985a, 1985b) を参照。動的文法理論を理論的枠組みとし、「ギャップの原則」と「顕在化の原則」が原動力となり、「モデル依存の拡張」が発生したと分析する構文研究として、河野 (1984)、鈴木 (1985a, 1985b)、藤 (1986a, 1986b) を参照されたい。

参考文献

- Backhouse, Anthony E. 2006. Inflected and uninflected adjectives in Japanese. Adjective classes, ed. by R.M.W. Dixon and Alexandra Y. Aikhenvald, 50–73. Oxford: Oxford University Press.
- Baker, Mark C. 2003. Lexical categories: Verbs, nouns and adjectives. Cambridge: Cambridge University Press.
- Beck, David. 2002. The typology of parts of speech systems: The markedness of adjectives. New York, NY: Routledge.
- Bhat, D.N.S. 1994. The adjectival category: Criteria for differentiation and identification. Amsterdam: John Benjamins. SLCS 24.
- Bornstein, Mark H., Linda R. Cote, Sharone Maital, Kathleen Painter, Sung-Yun Park, Liliana Pascual, Marie-Germaine Pecheux, Josette Ruel, Paola Venuti and Andre Vyt. 2004. Cross-linguistic of vocabulary in young children: Spanish, Dutch, French, Hebrew, Italian, Korean and American English. Child Development 75, 1115–1139.
- Clancy, Patricia M. 1985. The acquisition of Japanese. The crosslinguistic study of language acquisition, Volume 1: The data, ed. by Dan Isaac Slobin, 373–524. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Clark, Eve V. 1987. The principle of contrast: A constraint on language acquisition. Mechanisms of language acquisition, ed. by Brian MacWhinney, 1–33. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Clark, Eve V. 1990. The pragmatics of contrast. Journal of Child Language 17, 417–431.
- Clark, Eve V. 1993. The lexicon in acquisition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Eve V. 2003. First language acquisition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Eve V. 2009. First language acquisition, second edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William. 2001. Radical construction grammar: Syntactic theory in typological perspective. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (Eds.). 2006. Adjective classes: A cross-linguistic typology. Oxford: Oxford University Press.
- 藤正明 1986a. 「擬似等位接続詞について：as well as を中心に (1)」 『英語教育』 35:2, 68–70.
- 藤正明 1986b. 「擬似等位接続詞について：as well as を中心に (2)」 『英語教育』 35:3, 72–74.

- Fujiwara, Miho. 1999. Acquisition of default inflectional suffixes: Japanese adjectives. *The University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 6:1.
<http://ling.upenn.edu/papers/v6.1-contents.html>
- 福地肇 1987. 「動的文法理論の提案」 『言語』 16:12, 46–53.
- Givon, Talmy. 2001. *Syntax* (two volumes), revised edition. Amsterdam: John Benjamins.
- 飛田良文・浅田秀子 1991. 『現代形容詞用法辞典』 東京：東京堂出版
- 飯豊毅一 1973. 「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」 鈴木一彦・林巨樹・編 『形容詞・形容動詞：品詞別日本文法講座第4巻』, 163–206. 東京：明治書院
- 今井むつみ・針生悦子 2007. 『レキシコンの構築：子どもはどのように語と概念を学んでいくのか』 東京：岩波書店
- 伊藤克敏 1990. 『こどものことば』 東京：勁草書房
- 伊藤克敏 2005. 『ことばの習得と喪失：心理言語学への招待』 東京：勁草書房
- 伊藤彦彦 1988. 「発話の発達と統語構造の出現」 『静岡大学教育学部研究報告：人文社会科学編』 39, 135–140.
- Ito, Tomohiko. 1989a. Sentence production: From before to after the period of syntactic structure. *Mita Working Papers in Psycholinguistics* 1, 51–55.
- Ito, Tomohiko. 1989b. Self-repairs in speech: From before to after the period of syntactic structure. *Tokyo Linguistic Forum* 2, 75–80.
- 伊藤彦彦 1990. 「発話の非流暢性を手がかりとした発話の発達研究：発話における文処理機能発達モデル」 『日本語学』 9:10, 101–110.
- Jakobson, Roman. 1941. *Kindersprache, Aphasie und allgemeine Lautgesetze*. Uppsala: Almqvist & Wiksell.
- Jakobson, Roman. 1968. *Child language: Aphasia and phonological universals*. The Hague: Mouton. (服部四郎・編・監訳 『失語症と言語学』 岩波書店)
- Jakobson, Roman. 1971. *Studies on child language and aphasia*. The Hague: Mouton.
- Kajita, Masaru. 1977. Towards a dynamic model of syntax. *Studies in English Linguistics* 5, 44–76.
- 梶田優 1984. 「英語教育と今後の生成文法」 『言語普遍性と英語の統語・意味構造に関する研究：昭和57・58年度科学研究費補助金一般研究B(課題番号57450040)研究成果報告書』, 60–94.
- Kajita, Masaru. 1986a. From periphery to core: A research strategy. Paper read at the TELC meeting of September, 1986.
- 梶田優 1986b. 「チョムスキーからの三つの分岐点」 『言語』 15:12, 96–104.
- Kajita, Masaru. 1997. Some foundational postulates for dynamic theories of language. *Studies in English linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday*, ed. by Masatomo Ukaji et al., 378–393. Tokyo: The Taishukan Publishing Company.
- Kajita, Masaru. 2002. A dynamic approach to linguistic variations. *Proceedings of the Sophia symposium on negation*, ed. by Yasuhiko Kato, 161–168.
- 梶田優 2004a. 「<周辺><例外>は周辺・例外か」 『日本語文法』 4:2, 3–23.
- 梶田優 2004b. 「動的文法理論の考え方と事例研究(2003年9月6日(土)公開講演会)」 大名力・編 『平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)(研究課題番号13410132)研究成果報告書』, 67–121.
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/ohna/papers/kajita/kajita2004.pdf> (講演原本)

- <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/ohna/papers/kajita/kajita2004x01.pdf> (資料組み込み版)
- 柏谷嘉弘 1973. 「形容動詞の成立と展開」 鈴木一彦・林巨樹・編 『形容詞・形容動詞：品詞別日本文法講座第4巻』, 95-162. 東京：明治書院
- 春日正三 1976. 「形容動詞の研究：文語文法・肯定学説を中心にして」 『立正大学文学部論叢』 56, 55-75.
- 加藤重広 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京：ひつじ書房
- 加藤重広 2007. 「日本語の述部構造と境界性」 『北海道大学文学研究科紀要』 122, 97-155.
<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/27976>
- 加藤重広 2009. 「日本語形容詞再考」 『北海道大学文学研究科紀要』 129, 63-89.
<http://eprints2008.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/39997>
- 慶野正次 1976. 『形容詞の研究』 東京：笠間書院
- 金田一春彦 1950. 「国語動詞の一分類」 『言語研究』 15, 48-63.
- 金田一春彦 1976. 『日本語動詞のアスペクト』 東京：むぎ書房
- 金田一春彦 1988. 『日本語 新版(下)：岩波新書3』 東京：岩波書店
- 北原保雄 2010. 『日本語の形容詞』 東京：大修館書店
- 小林春美 1997. 「語彙の獲得：ことばの意味をいかに知るのか」 小林春美・佐々木正人・編 『子どもたちの言語獲得』, 85-109. 東京：大修館書店
- 小林春美 2008. 「語彙の獲得：ことばの意味をいかに知るのか」 小林春美・佐々木正人・編 『新・子どもたちの言語獲得』, 89-117. 東京：大修館書店
- 小島俊夫 1984. 「形容動詞とは何か」 鈴木一彦・林巨樹・編 『研究資料日本文法3：用言編(二) 形容詞・形容動詞』, 147-187. 東京：明治書院
- 国立国語研究所・編 1972. 『形容詞の意味・用法の記述的研究：国立国語研究所報告44』 東京：秀英出版
- 児馬修 1984. 「文法の核と周辺5：史的統語論の視点から」 『言語』 13:5, 102-111.
- 河野継代 1984. 「文法の核と周辺4：英語の‘Pretty’構文について」 『言語』 13:4, 108-116.
- 河野継代 2012. 『英語の関係節』 東京：開拓社
- 工藤真由美 2002. 「現象と本質：方言の文法と標準語の文法」 日本語文法学会・編 『日本語文法』 2:2, 46-61. 東京：くろしお出版
- 工藤真由美・編 2004. 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系：標準語研究を超えて』 東京：ひつじ書房
- 工藤真由美・編 2007. 『日本語形容詞の文法：標準語研究を超えて』 東京：ひつじ書房
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- MacWhinney, Brian. 1985. *Hungarian language acquisition as an exemplification of a general model of grammatical development. The crosslinguistic study of language acquisition, Volume 2: Theoretical issues*, ed. by Dan Isaac Slobin, 1069-1155. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- MacWhinney, Brian. 2000. *The CHILDES project: Tools for analyzing talk*, 3rd edition. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Martin, Samuel. 1975. *A reference grammar of Japanese*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Miyagawa, Shigeru. 1987. *Lexical categories in Japanese*. *Lingua* 73, 29-51.
- Miyata, Susanne. 2004a. *Japanese: Aki corpus*. Pittsburgh, PA: Talkbank. 1-59642-055-3.
- Miyata, Susanne. 2004b. *Japanese: Tai corpus*. Pittsburgh, PA: Talkbank. 1-59642-057-X.
- 森田良行 1989. 『日本語をみがく小辞典<形容詞・副詞篇>：講談社現代新書969』 東京：講談社

- 森田良行 2008. 『動詞・形容詞・副詞の辞典』 東京：東京堂出版
- 毛瑩 2011. 「日本語の連体修飾句に関する習得研究概観」 『比較社会文化研究』 31, 59–66.
<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/21902>
- 毛瑩 2012. 「動的文法理論から見る可能な文法」 『比較社会文化研究』 32, 19–28.
<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/25226>
- 村木新次郎 1998. 「名詞と形容詞の境界」 『言語』 27:3, 44–49.
- 村木新次郎 2009. 「書評：八亀裕美・著 『日本語形容詞の記述的研究：類型論的視点から』」 『日本語の研究』 5:4, 81–87.
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007593059>
- 中村吉秀 1993. 「形容詞文の機能」 『福井工業高等専門学校研究紀要：人文・社会科学』 27, 1–6.
<http://www.ge.fukui-nct.ac.jp/~nihongo/.../keiyohshibun.html>
- Namai, Kenichi. 2002. The word status of Japanese adjectives. *Linguistic Inquiry* 33, 340–349.
- Nishiyama, Kunio. 1998. The morphosyntax and morphophonology of Japanese predicates. Doctoral dissertation, Cornell University.
- Nishiyama, Kunio. 1999. Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8:3, 183–222.
- Nishiyama, Kunio. 2005. Morphological boundary of Japanese adjectives: Reply to Namai. *Linguistic Inquiry* 36, 134–143.
- 仁田義雄 1998. 「日本語文法における形容詞」 『言語』 27:3, 26–35.
- Noji, Junya, Norio Naka, and Susanne Miyata. 2004. Japanese: Noji corpus. Pittsburgh, PA: Talkbank. 1-59642-058-8.
- O'Grady, William. 1997. *Syntactic Development*. Chicago: University of Chicago Press.
- 小椋たみ子 2007. 「日本の子どもの初期の語彙発達」 『言語研究』 132, 29–53.
- Ohkado, Masayuki. 1991. On the status of adjectival nouns in Japanese. *Lingua* 83:1, 67–82.
- 大久保愛 1967. 『幼児言語の発達』 東京：東京堂出版
- 大久保愛 1984. 『幼児言語の研究：構文と語彙』 東京：あゆみ出版
- 大名力 1990a. 「接続詞としての *immediately* (1)」 『英語教育』 39:4, 68–71.
- 大名力 1990b. 「接続詞としての *immediately* (2)」 『英語教育』 39:5, 69–71.
- Ohna, Tsutomu. 1997. On the development of conjunctive use of *-ly* adverbs. *Studies in English linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday*, ed. by Masatomo Ukaji et al., 528–539. Tokyo: The Taishukan Publishing Company.
- 大室剛志 2005. 「構文の基本形と変種：文法事項の配列順序への示唆」 『国際開発研究フォーラム』 29, 91–105.
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110001131066>
- Pustet, Regina. 2003. *Copulas: Universals in the categorization of the lexicon*. Oxford: Oxford University Press.
- 坂本恵子・針生悦子 2011. 「幼児における新奇な形容詞の解釈」 『心理学研究』 82:1, 24–31.
- Sasaki, Kazutaka. 1997. Derived nominals and grammatical dynamism: A comparative syntax of English and Japanese. *Studies in English linguistics: A festschrift for Akira Ota on the occasion of his eightieth birthday*, ed. by Masatomo Ukaji et al., 558–564. Tokyo: The Taishukan Publishing Company.

- Sasaki, Kazutaka. 2004. Prenominal modifiers in English and Japanese. 『宇都宮大学国際学部研究論集』 17, 65–76.
<http://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/handle/10241/1890>
- Sasaki, Kazutaka and Takao Yagi. 2003. Prenominal modifiers in English: An outline of a dynamic analysis. Empirical and theoretical investigations into language, ed. by Shuji Chiba et al., 612–618. Tokyo: Kaitakusha.
- Slobin, Dan I. 1966. Comments on “Developmental psycholinguistics”: A discussion of McNeill’s presentation. The genesis of language: A psycholinguistic approach, ed. by F. Smith and G. A. Miller, 85–91. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Slobin, Dan I. 1973. Cognitive prerequisites for the development of grammar. Studies of child language development, ed. by C. A. Ferguson and D. I. Slobin, 175–211. New York, NY: Holt, Rinehart and Winston.
- Slobin, Dan I. 1985. Crosslinguistic evidence for the language-making capacity. The crosslinguistic study of language acquisition, Volume 2: Theoretical issues, ed. by Dan Isaac Slobin, 1157–1256. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Slobin, Dan I. 1997. The origins of grammaticizable notions: Beyond the individual mind. The crosslinguistic study of language acquisition, Volume 5: Expanding the contexts, ed. by Dan Isaac Slobin, 265–323. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Stassen, Leon. 1997. Intransitive predication. Oxford: The Clarendon Press.
- 杉浦正利・中則夫・宮田 Susanne・大嶋百合子 1997. 「日本語習得研究のための情報システム CHILDES の日本語化」 『言語』 26:3, 80–87.
- 鈴木一彦・林巨樹・編 1973. 『形容詞・形容動詞：品詞別日本文法講座第4巻』 東京：明治書院
- 鈴木一彦・林巨樹・編 1984. 『研究資料日本文法3：用言編（二）形容詞・形容動詞』 東京：明治書院
- 鈴木猛 1985a. 「前置詞としての *out* (1)」 『英語教育』 34:7, 68–70.
- 鈴木猛 1985b. 「前置詞としての *out* (2)」 『英語教育』 34:8, 70–72.
- 田川拓海 2005. 「動詞と形容詞の形態統語論的な相違点について」 『筑波応用言語学研究』 12, 71–84.
<http://dlit.huu.ac.jp/linguistics.html>
<http://dlit.huu.ac.jp/paper.html>
- 高橋太郎 1975. 『幼児語の形態論的分析：動詞・形容詞・述語名詞：国立国語研究所報告 55』 東京：秀英出版
- 高橋太郎 1998. 「動詞から見た形容詞」 『言語』 27:3, 36–43.
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・斎美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈 2005. 『日本語の文法』 東京：ひつじ書房
- 谷光生 1997. 「ミニマリスト・プログラムと語彙範疇」 『英語青年』 143:5, 31–34.
- Thompson, Sandra A. 1988. A discourse approach to the cross-linguistic category ‘adjective’. Explaining language universals, ed. by John A. Hawkins, 167–185. Oxford: Basil Blackwell.
- Wells, Gordon. 1985. Language development in the pre-school years. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wetzer, Harrie. 1996. The typology of adjectival predication. Mouton de Gruyter. EALT17.
- 八亀裕美 2001. 「現代日本語の形容詞述語文」 『阪大日本語研究別冊：大阪大学大学院文学研究科日本語学講座 2000 年度修士論文』 1, 1–144.

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBNIHONGOK/sup01.pdf>

八亀裕美 2003. 「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」 『阪大日本語研究』 15, 13–40.

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBNIHONGOK/15-02.pdf>

八亀裕美 2004a. 「形容詞の文中での機能」 『阪大日本語研究』 16, 51–65.

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/metadb/up/LIBNIHONGOK/16-04.pdf>

八亀裕美 2004b. 「述語になる品詞の連続性：動詞・形容詞・名詞」 工藤真由美・編 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系：標準語研究を超えて』, 78–119. 東京：ひつじ書房

八亀裕美 2005. 『日本語形容詞の記述的研究：類型論的視点から』 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座博士論文

八亀裕美 2007. 「第2章 形容詞研究の現在」 工藤真由美・編 『日本語形容詞の文法』, 53–77. 東京：ひつじ書房

八亀裕美 2008. 『日本語形容詞の記述的研究：類型論的視点から』 東京：明治書院

Yamakido, Hiroko. 2000. Japanese attributive adjectives are not (all) relative clauses. WCCFL 19 Proceedings, 588–602.

山崎馨 1984. 「形容詞とは何か」 鈴木一彦・林巨樹・編 『研究資料日本文法3：用言編（二）形容詞・形容動詞』, 1–17. 東京：明治書院

矢澤真人 1998. 「日本語の感情・感覚形容詞」 『言語』 27:3, 50–56.

吉原友美 2012. 「日本語の形容動詞の研究」 慶応義塾大学大学院社会学研究科平成 23 (2011) 年度修士論文